

## ネット登山の落とし穴。山岳会では……

ひっそりとした岩の間を縫っていると、上の方から時折、歓声が聞こえてくる。最後のひと登りで岩の間からひょこっと祠の裏に飛び出して喧噪の山頂に立つと北鎌尾根は終わる。仲間と握手を交わし、祠の前で写真を撮ろうとしたら、「私たちの番ですよ」と、順番待ちをしているご婦人から抗議された。「あ、どうもすみません」、前を見ると、祠に向かってカメラやスマホを持った登山者の列。昨今の「ヘルメット着用推奨山域」の浸透が、みんながヘルメットをかぶっているの、ヘルメットは北鎌尾根を登ってきたパーティーのトレードマークではなくなった。以前は、祠の裏から頭を出すと、山頂に立っていた人たちが拍手や、あ、北鎌からですか、とか、大変だったでしょう、などというねぎらいの言葉で迎えてくれたものだったけれど、今年は、行列に横入りしてきた無作法な連中程度の扱いしかしてもらえなくなったようである。

今回は、山の世界の様変わりのお話。ただ、自分たちの足もともそういう話とは無関係ではない、ということを考えてみたい。

### 同行者はネットで。現地集合。便利!

時刻も15時を大きく回っている。「さっさと降りようぜ」と、仲間をうながしてザックを担いでもすぐには下りられない。槍の穂先からの下山も順番待ちであった。

肩の小屋の前では、全員がピカピカのヘルメットをかぶり、山道具のカタログから抜け出したような登山ウェアで身を固めた若い男女のグループが、ビールを片手に、「槍ヶ岳登頂を祝して乾杯」や「やったあ」「ばんざい」などと歓声をあげている。どこかのツアーか、何かのグループだろうか、登山のパーティーというよりは合コンのノリのような気もする。

にぎやかな肩の小屋を後に、今日のテント場、殺生ヒュッテへ下りはじめると、こんな時刻だというのに登山者が三々五々登ってくる。歩いたり立ち止まったり。間隔もペースもバラバラである。「こんにちは」と挨拶しても返事がない。はたと思いついて、言葉を変えて道を譲ると案の定、「アンニョンハセヨ」「カムサハムニダ」のすれ違いは殺生まで続いた。彼らの今日の目的地は槍の肩、また明日も朝早くから穂先への渋滞が続くのだろうな、と思いつつ足を運んだ。そういえば昨日は、西欧系の外国人ばかり10数人のパーティーが下ってくるのにすれ違った。昨今、外

国人の登山者も急増している。この山に出かけてくる前に放送されたTV番組を思い出した。ネット登山の話である。

ネットで同行者を募り、現地に集合して即席のパーティーで山に登る人たちが増えている。しかし、ほとんどが初対面で、メールでの自己紹介や山行歴からは実際の登山の力量や経験を把握することは難しい。登り始めてから体力不足であったり、リーダーの指示に従わなかったりなどの問題が起き、結果としてパーティー全体が危険な状況に置かれるケースもあるという。また、自分の派手な成功体験が目ざされ、短時間で難しいコースを制覇するたびに評価が高まるネットへの投稿を続けるうちに、山を楽しむことよりも、注目を集めるために、より無理な山行をするようになり、体調を崩してしまったりという例からは、ネットは居心地のいい空間である反面、目的を見失ってしまう怖さがあるという反省が導き出される。その一方で、ウェブで募った仲間同士で費用を負担し合って雇った登山ガイドをつけて入山し、「安全対策に力を入れたい」というグループや、個人の登山記録を紹介するサイトが、それまで載せてきた入山ランキングのコーナーをやめ、危険情報や事故のリスクなどを訴えるページを新設したり、計画書提出をうながすシステムの利用を呼びかけるなど、安全対策へシフトしてきている動きなども紹介されてい

# 私の登山

18

## ワタシと登山

半田ファミリー山の会代表  
洞井 孝雄

どんな山がやりたいんだ?

た。

似たようなコトが起きているのか?

先日、県連盟の遭対の会議で、「提出された計画に、各会ではどのようにブレーキをかけているか?」という質問が出た。最近、ホームページを見て入会してくる会員が増えて、そのひとたちの力量を山行管理担当者が把握する前に計画が提出されてくる、リーダーの力量から判断しようとしても、知らないメンバーがリーダーになつていて、計画が力量に見合ったものかどうか、をチェックするのが難しくなっている、という「悩み」であった。この辺りはネット登山と軌を一にしてい

るように思える。

会の機関紙に、「最近では体に余裕がない、というのか、いつも体調を気にしながら、なにかに急ぎ立てられ、追い立てられるように山登りをしているような気がする。体力や体機能が落ちてきたこともあるのだから、そういうこととはまた別に、周囲のペースに翻弄されているようでもある。ペースというものは、歩く速度のことではない、山行の頻度のことだ」と書いていた。私は会の山行管理担当者でもあるので、毎日のように会員から山行計画書が出されてくる。手渡されたり、郵送されたり、夜中に家のポストに投げ込まれていたり……山に行くこと、行けることはいいことなのだけれど、計画書に記入されたメンバーの顔触れや頻度、山域をみると、のべつ幕な

し、競争のようにして山行をしているような感じを受けるものも多い。山行報告も、その山がどうだったか、どのようにして登ったか、ということより、あそこへ行ったことへ行った、何週連続で入山している、ということに関心があるように見える。山行回数や体力やスキルの問題に終始してしまうと、山行そのものから知性が欠落してしまう。ネット上のランキングなんかと同根のような気がするのだ。

みんなで費用負担をしてガイドをつけるという方法も、発想としては面白いが、これからどこへ行くかとしていくの、これからのと考えると評価もできない。ネットで募った「イベント」を安全に成功させる手段としてはよく考えられているが、日常的な個々の登山要求に応えるためには、こういう形でいつまでも同じところで足踏みしているわけにはいかない。参加者の間口も山域も広がっていくだろうし、

一人ひとりの要求も登山の形態も進化していくはずだ。登山用具などの学習会も定期的に行われているということだが、人間関係の醸成やパーティーとリーダー、メンバーの関係などは果たして形成されていくのだろうか、と余計なことを考えてしまった。合コンのノリでは登山はちよつと、なあ……。

登山では、「行った」「私も行けた」という体験ではなく、こんな準備とこんな対応、条件が必要だという情報の選択、「行きたい」と「行ける」とは違うという認識、自分がその山に登る力をもっているかどうかの把握、そしてお互いの力量を知る仲間と、パーティーをけん引できるリーダーが大事である。ネット登山の落とし穴は、山岳会の運営や登山活動とも無関係ではなく、同じように、どこかに口を開けていそうである。



槍の穂先に立つひとたち (2015.8.9 直下の登りで)



穂先を見上げる (2015.8.9 北鎌平で)

### 傘。使うのは雨の時ばかりじゃないぞ。

途中、メンバーの一人の足が動かなくなった。ピークは目の前である。ザックを下ろして、その場で休んでいるよう指示してピークを往復した。下ってくると、ずいぶん回復したらしく、握り飯をほおばっているところであった。

「休んだおかげで、回復しました。でも、ここは日差しをよけるところがなく、暑くて暑くて……」

止まった場所は尾根上で、左右は岩と下草だけの場所であった。直射日光を遮るものはない。

「折りたたみ傘があるだろうが……」  
「……」

返事がなかった。彼のザックには、折りたたみ傘は入っていなかったのだ。

「雨具」というと、カッパを思い浮かべるひとが多いと思うが、私たちの計画書の装備欄には「雨具 (カッパ&折りたたみ傘)」と記載されている。カッパの素材は昔とは格段に進化してきているとはいえ、いまだにパーフェクトではない。それを補完し、組み合わせることで濡れや蒸れを最小限におさえる装備として説明される折りたたみ傘だが、使うのは雨の日ばかりではないというお話である。